

ライスセンターの荷受け能力を上回る小麦

9年度はコスト減に配慮

今年の総会は6月25日に開きました。我々の総会は、指導機関や取引先など多くの関係する人達にも集まってもらっています。公表することにより経営内容を良く理解してもらおうと同時に、忌憚らない意見を聞くことをねらいとしています。

さて、総会では、8年度の事業実績と9年度の方針が承認されましたが、残念ながら8年度の農産物の販売額は目標を下回る4億円余にとどまりました。

0157による農産物価格の低迷、播種時の長雨による小麦の作柄不良などによるものですが、4億5千万円程度は目論んでいただけに残念です。このため、1千万円を超える赤字ができました。平成9年度はこの欠損金解消もねらい、4億6千万円を販売目標に掲げました。そして、思い切った我々3人の役員報酬を1ヶ月につき30万円減ずることにしました。法人経営者としては、結果責任があるわけですから、厳しいがやむを得ないところです。

さらに、我々の報酬減のほかにコストをできるだけ切り詰めること、この2年間多大な投資をしてきただけに、設備投資を極力抑えること、契約栽培のほかに消費者への直売の方向を探ることなどの対応も打ち出しました。9年度は、正念場の年になりそうです。

7月、収穫期の天候が収益に大きく影響する小麦にとっては、福の神といってもいい好天続きです。小麦担当の竹内雅孝は豪胆なところもあるのですが、それでもこの時期になると、胃が痛みだすと言います。小麦は、降雨が続くと、穂発芽し

てしまい、1円の商品価値さえなくなってしまうのです。1分で1万円を得るか、失うか、どちらかなのです。

今年の小麦は、作柄が近年になく良いだけに、好天とあいまって、5台のコンバインがフル稼働しています。ところが、天候に恵まれ、作業が進んだことに加え、収量も多いために、大きな問題が生じました。農場の本拠地深浦町で刈り取った小麦は、ここから約70km離れた農協のライスセンターに乾燥調製を委託していますが、7月16日から3日間連続で100℃程度送り込んだところ、乾燥能力を上回る量となり、4日目に搬入ストップがかかったのです。

ライスセンターは、コメ用として設計されているので、仕方ないかもしれませんが、荷受け能力が我々の刈り取りに対応できないことは残念です。計画した作業を休まなければなりません。臨時雇用もいるだけに、痛いところです。幸い好天が続いたため穂発芽の心配はありませんでしたが、刈り取り適期を逃すことにもなり、考えなければならぬことです。来年度は対策を検討する必要があります。

日本海の海沿いに展開する小麦畑でのコンバイン5台による刈り取りは、雄大なものです。我が国の農業でこれほど壮大な小麦刈り取り風景は、それほどないのではないかと自負しております。若き日に夢見た大型機械農業を実践していることに、誇りを感じるときでもあります。

小麦を刈り取った跡地では、輪作を進めるために、私の担当するダイコンの作付け準備に入ります。小麦刈り取り後、本誌の前号で紹介したアキユーム式のサブソイラーで、小麦稈のすき込みと深耕を同時に行います。この作業では小麦稈がほ

とんど地表面に残りません。性能の高い機械です。深耕後、軽くロータリ耕をして、土壌を平らにし、その後、施肥、耕運して、ダイコンの植え付けスタンバイとなります。

小麦稈がすべてすき込まれているだけに、有機物に不足することはありません。こうした輪作技術は、永続的な農法の点から大事なことです。一般的にはなかなか行われていないようです。

有機農産物認定をどうするか

今、消費者からは食品の安全性を求める声が強まっています。その結果、農薬や化学肥料の軽減あるいはゼロ化に向けた農法に取り組み生産者が多くなっています。当農場でも有機肥料・無農薬によるダイコン生産を始めて、好評を得ていますが、これで問題になるのが、無農薬や有機農法であることを誰が証明するのか、ということだと思います。我々生産者が強調するだけでは客観性がないのです。この問題に対して、漬物業者の方から、生産者が団体をつくって認証するようにしてはどうかという提案がありました。この提案は私の心をとらえました。

農林水産省は確かに、有機農産物とはこういうものだというガイドラインを示していますが、消費者が信頼するお墨付きやチェックを得るといふ制度にはなっていないのです。

聞くところによると、アメリカは、農薬や化学肥料を使わないで生産した農産物が「オーガニック」と評されて、物凄い勢いでびびてきていることです。そのオーガニックは、政府の法的な基準があつて、州政府、あるいは州政府が認めた団体によって認証されることが必要で、不正なケースには罰則まであります。

ちなみに、新聞で知ったのですが、オハイオ州にあるOCIA(有機農産物改良協会)という認



上：日本海を見下ろす小麦畑での収穫風景

下：ダイコンハーベスタによる収穫風景。オペレータが木村（筆者）



きそうです。それもただ単に収穫だけでなく、掘り取りし、葉をカットした後、コンテナにいれるような仕組みになっているので、フォークリフトを使って、ただちにトラックに積み込むというように、効率の良い一貫作業がなされることになりました。

ダイコンを人力で掘るだけであれば、がんばる人で1日10aは可能です。しかし、それをトラクターに乗せたりする労力や、労働のきつさからみると、1200万円という高価格の収穫機械ですが、導入した意義はあるとみています。

多くの人達と交流に意義

7月も下旬になると、津軽国定公園内であつて、風光明媚な海岸線をもつ深浦町への観光客が目立ってきます。

私が平成6年に、この深浦町に建てたログハウスを利用する人も多くなります。このログハウスは、世界遺産白神山と美しい日本海を見ながら、若い人達など大いに農業賛歌を前提とした議論をしようという、(崇高な?) ねらいで自分のフトコロ具合を考えずに建設しました。農場でダイコンを担当していることもあって、「大根庵耕心塾」と名付けて、セルフサービスを原則に、基本的には宿泊料なしで利用してもらっています。農業者のほか、家族や会社で利用することも多いのですが、帰り際、その印象をノートにメモしてもらっています。

その中からいくつか紹介します。

「黄金崎農場へは来る運命になっていたんですね。農場の方と話をすることができ、とても勉強になりました。このログハウス風景もきれいで気に入ってしまいました。いつかは、オレもという思いがフツフツと沸いてきます(福島県・青年農業者)」

「初めて見る大農場と広い海、こういうところは気持ちが良い」

「この農場を見て然、ポーゼン(新潟県)」「すばらしい樹木をふんだんに使い、工夫をこらしたつくりで感心した。そして、設備のすばらしさに黄金崎農場のスケールの大きさをうかがえた(秋田県)」

もちろん宿泊提供ということもあって、お褒めの言葉は割り引いて受け止めなければなりません。利用した人達がこうした感動をもってくれたことに対しては、素直にこの「大根庵耕心塾」を建てて良かったと思っています。

利用者とは、ほかの農場員にも働きかけて、仕事の狭間をぬってできるだけ交流するようにしています。こんな形で、多くの人達と結び合い、話し合っていくことも、どちらかという土地味な立場にある農業者にとって、大切なことのような気がしています。

願わくは、農業に関心をもつ若者にもっと、活用してもらいたいものです。

それでも、先日、知人の教授に頼まれて、弘前大学で講義したとき、女子学生が非常に熱心に、私の拙い農場話を聞いてくれたようで、若い人達も興味はあるのだということをもつて知り、さらなる意欲でもって、農場運営に努めなければ、と、気を引き締めています。



きむら・しんいち/1950年9月生まれ。青森県立五所川原農林高校卒業。4Hクラブの仲間の佐々木君夫、竹内雅孝とともに「大規模で、企業的で、給料をもらおう」農場を夢見て、76年農事組合法人黄金崎農場を設立